

- 1 派遣期間 平成23年10月20日（木）～10月21日（金）
2 研修先 学校名 新潟大学教育学部附属長岡校園
【附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校】
所在地 〒940-8530 新潟県長岡市学校町1丁目1番1号
<http://www.nagaoka.ed.niigata-u.ac.jp/>

3 研修内容

文部科学省研究開発指定 幼小中一貫教育研究 研究主題「社会的な知性を培う」

（1）長岡校園の紹介

長岡校園は、幼小中が同一敷地内に併設されている利点を生かし、平成15年から18年までの4年間文部科学省の研究開発指定を受け、幼小中の連携教育の在り方について提言をした。そして、平成22年度から文部科学省の研究開発指定を受け、幼小中の一貫教育の在り方について取り組み、今年度は第2年次ということである。

現在の教育では、子どもの身体的発達の加速化や学力向上への期待、幼小中の円滑な接続など、様々な課題を解決するための一貫・連携教育の必要性が高まってきている。長岡校園では、幼小中の12年間をつなぐ一貫教育の在り方を探り、広く発信していくことで、「一貫教育のパイロット校」「地域の拠点校」としての使命を果たすことをめざしている。

（2）長岡校園の取り組み

①「社会的な知性を培う」でめざす子ども像

長岡校園では、「社会的な知性」を「持続可能な社会を創りあげる資質・能力」と定義している。持続可能な社会を創りあげるには、互いに尊重し合う人間関係をつくり、学んだ知識・技能や培ってきた力を生かしながら、人々の暮らしや環境、社会の諸問題へ目を向け、自ら考え、判断し、実践するための資質・能力を子どもたちにはぐくんでいく必要があると考えている。

また、めざす子ども像を「多様な見方・考え方や立場から物事をとらえ、新たな関係を創っていく子ども」と設定している。自分と他者のものの見方・考え方の共通点や相違点をとらえたり、その共通点や相違点がなぜ生まれるのかを考えたりしたうえで、「ひと・もの・こと」の新たなつながりに気付いたり、よりよいあり様を創りあげたりする子どもが、持続可能な社会を創りあげることができると考えている。

②「社会的な知性」をはぐくむための3つの柱

○ 社会創造科の新設

持続可能な社会を創りあげる資質・能力をより効果的にはぐくむため、「社会創造科」を新設した。長岡を学習の場とし、子どもたちが地域の大人や仲間とかかわり合いながら、地域の問題を解決していく活動を組織している。

- ・ 持続可能な社会に関する認識・態度
- ・ 4つの資質・能力（自己推進力、人間関係構築力、問題解決力、開発力）
- ・ 新たなものを創りだす技法・技能

○ 「協働型学習」位置付け

教科等の「基礎的・基本的な知識・技能」を習得し、「思考力・判断力・表現力」をはぐくむため、授業の中に「協働型学習」を位置付けた。「協働」とは、問題解決過程のある段階で異なる見方・考え方・表し方をもつ他者（同年齢・異年齢）とかかわり、相互にプラスの影響を受け合いながら（＝互惠関係）、学習内容の獲得および、資質・能力を高めていくことである。「協働」場面では、「互惠関係」の構築をめざし、5つの要素から見た手だてを取り入れている。

- | | |
|-------------|-------------|
| 要素① 場面・目的意識 | 要素② 交流相手 |
| 要素③ 交流させるもの | 要素④ 交流方法・形態 |
| 要素⑤ 記録方法 | |

○ 一貫教育カリキュラムの開発

社会的な知性を効果的にはぐくむための一貫教育カリキュラムを開発した。各教科で設定した資質・能力の高まりを示した資質・能力系統表と各教科の年間指導計画の中に資質・能力の高まりを位置付けた年間単元配列表の作成を行っている。



(3) 公開授業参観

中学校 3年1組 技術・家庭科（技術分野）

植物工場をめざそう！栽培条件を調整した養液栽培

指導者 松本 浩嗣

① 授業における「協働型学習」の取り組み

5つの要素	「協働」場面（予備栽培の考察場面）
① 場面・目的意識	予備栽培の結果が明らかになり、他の人の結果と一緒に考察をして条件による栽培結果の違いをより多くのデータから明らかにしたいと願った場面
② 交流相手	違う条件について予備実験をし、重視したい栽培目的が同じ生徒
③ 交流させるもの	予備栽培を行った葉物野菜及び栽培記録シート
④ 交流方法・形態	予備実験で着目した条件が違う生徒3～4名で、ワークシートを使いながら話し合い、栽培条件による生育の違いを明らかにする
⑤ 記録方法	結果及び考察を記録するワークシート

② 授業の様子

光の色や量、温度等の栽培条件による生育の違いを通して、実験栽培をもとに生徒どうしで検討し、目的に合った栽培計画を考える授業であった。実験栽培の結果を他の生徒と比べながら、条件による生育の違いを明らかにしていた。

4 感想

「協働」場面における「互恵関係」がいかに構築されているかという観点から、授業を参観し、協議会に臨んだ。授業の様子は、話し合い活動を中心に「互恵関係」が構築されていた。一人一人が積極的に話し合いに参加し、意見を交流し合うことは、普段授業をしているなかで、簡単なようで困難なことであるため、日頃からの授業での取り組みが感じられた。今後、言語活動の充実が取り上げられているなかで、「協働」「互恵」という考え方は重要視していかなければならないと感じた。しかし、言語活動の充実ということで、話し合い活動ばかりを取り入れ、本来の教科の独自性や評価法に関連がある話し合い活動なのかを見定めなければならぬと感じた。技術分野において、どこで、どのように、どんなふうに言語活動の充実を図っていくかを、授業を展開するなかで、よく検討していかなければならないのではないかと感じた。また、その評価をいかにせねばならないかも課題としてあげられるのではないかと感じた。